

## 移動する時空 あるいは 残された断片 : 笙野頼子『タイムスリップコンビナート』論

著者	疋田 雅昭
雑誌名	武蔵野大学日本文学研究所紀要
号	6
ページ	21-39
発行年	2018-02-26
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000894/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000894/</a>

スリップ

# 移動する時空 あるいは 残された断片

## —— 笙野頼子『タイムスリップコンビナート』論 ——

正田 雅昭

笙野頼子「タイムスリップコンビナード」は、平成六（一九九四）年六月の「文学界」に掲載された小説である。この作品に代表される笙野の幻想的な手法は、発表当初から「マジックリアリズム」の系譜として捉えられ、同時代にデビューした村上春樹や山田詠美、あるいは吉本ばななのような時代性をまといながら織りなされる幻想性とは異なった作家であると考えられてきた（一）。

だが、その幻想性は常に誤解と紙一重の位置にあったとも言え、発表翌月の創作合評で井口時男は以下の様に評している（二）。

最初からそれこそ大ざっぱな言い方ですが。設定が奇妙な電話に誘いだされて、ある不思議な場所に行きました。そこでおかしい発見をしましたみたいな、設定自体も単純だし、どうしてもその過程が何か同じパターンの反復になっちゃってしまうような単調さ、退屈さみたいなものがあります

でした？

この井口の理解は、この小説の一般的な印象を的確に述べていると同時に、笙野の「リアリズム」を考える際の陥穽に見事に陥ってしまったのではと言えないだろうか。

例えば、竹内佳代（三）は、この小説の冒頭をあげて以下のように評している。

作品全体の筋書きはすべてここに示されてしまっている。このたった百字程度で全体像が示せるほど、本作品の筋書きが貧弱なのだ。私たち読者はまずここから、一つのメッセージを受け取っておく必要がある。それは、筋書きではないところに本当の面白さをみつけて欲しいという作品からの切なるメッセージだ。

この指摘は重要である。このテキストは、物語を読んでしまふと、あまりにも単純かつ典型的なのである。典型的には、勝原晴希も指摘するように「記憶回復の書」<sup>(1)</sup>であると読んで間違いない。そして、そこで暗示される手法は、ある意味ありふれた精神分析的手法である。

だが、急いで付け加えねばならないのは、それを自由な解釈を許容するテキストとして存在しているとするのは、やや性急ではないかということだ。

本論の読解が依っているとところの一つも精神分析的読解であるが、これを笹野の私小説的なテキストとして読むには躊躇せざるを得ない。また、このテキストを「マジックリアリズム」の系譜として考えるのだとしても、ならば尚更その具体的内実を、テキストの外部、内部両面から詳細に検討してゆく必要があるのではないか。

「記憶」「歴史」「言語」といった着眼点も今となつては凡庸な視点であるが、本論ではそれが「物語」という形式性に対して意図的なコンフリクトを企図したテキストではないかと考えている。精神分析的な読解を軸としながらも、そこに「隠喩」的構造と笹野テキストに特徴的な「断片化」という問題を補助線として、あえて愚直にテキストの構造を検討してみること、で笹野文学全体を考える際に有効な新しい視角を提供出来るのではないだろうか。

## 1 無意識との対話 あるいは 別種の論理

去年の夏頃の話である。マグロと恋愛する夢を見て悩んでいたある日、当のマグロともスーパージェッターとも判らんやつから、いきなり、電話が掛かって来て、ともかくどこかへ出掛けるとしつこく言い、結局海芝浦という駅に行かされる羽目になった。

(傍線部は論者)

冒頭の語りは、物語が事後的な語りによるものであることを明確に示している。「恋愛」相手である「マグロ」とは、夢の中で「海芝浦という駅」に「私」——以後、語られる「私」を語り手の「私」と区別するために「沢野」と呼ぶ——を誘う何かである。この後展開するやりとりは、この二文において全て言い尽くされており、その意味でその展開に目新しいことはおきない。読者は、必然的に「物語内容」ではなく「物語言表」に注目せざるを得ないのである。

「マグロ」と「スーパージェッター」のイメージが並列して出ていることから、この両者には何らかの関係性が想定されるが、すぐに思いつくものはないだろう。むしろ、両者はどちらも電話の相手ではない。前者は、電話のやりとりの中で沢野にのみ聞こえてくる「声」であり、後者は沢野が会話の連想から思い至った「イメージ」である。

「スーパージェッター」とは、一九六五（昭和四〇）年一月

二〇日からおよそ一年にわたってTBS系列で放映されたSFアニメである。三〇世紀のタイムパトロール隊員であるジェットターが、自らが乗る「流星号」の衝突事故により二〇世紀に落下することで、二〇世紀の様々な犯罪捜査に協力するという話である。

「流星号」という名前の通り、その形状は流線型である。流線型の特徴は何よりもその高速移動にあるだろう。『マッハG o G o G o』（一九六七年）『パタリロ』（一九七八年）『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』（二〇一五年）など、サブカルチャーにはこの「流星号」という名前を付された乗り物は多く、そのどれもが高速の移動に特徴がある。

一方でマグロ等の大海を移動することに特徴がある魚類の身体的特徴もまた流線型である。特にマグロは、流線型の魚類としてその身体的特徴が説明されることが多い。マグロの移動速度については諸説あるが、この種の魚類は移動そのものによって呼吸機能を補っているので、効率的な移動は単なる身体機能以上の意味がある。だが、言うまでもなく形状の相同性は、両者を結びつけるものの一つではない。

つまり、一方が海で一方が東芝。外へ出ようとしたら方法はある。海へ飛び込むか、東芝の受付で社員証を見せるか。というわけでその駅のホームに魚でもなく海蛇でもなく東芝の社員でもない人間が降り立ったとしたら、折り返ししの電車が出るまでただ、ホームに立ち尽くしている事

し出来ないのだった。

海芝浦という駅がどんな場所であるか、読者は最初からその情報を詳しく提供されている。そして、「し出来ない」という言葉から、そこは何の意味もない行き止まりであることも明白である。よって、今後の読者の関心は、移動の行き先ではなく、移動の過程あるいは移動のきっかけに集中することになる。繰り返される包括的な語りは、読者がこの物語から「ストーリー」を読もうとする無意味さを、空想や会話、夢や現実が折り重なる時系列の混沌は「プロット」を読もうとする無効性を示しているといえる。

海芝浦への移動のきっかけは、一本の「電話」であるが、電話のやりとりが繰り返し「夢」と語られることは重要だ。以後のやりとりで重要な役割を果たすのは、論理的必然性ではなく、言語と言語に偶然生じる隠喩的關係である。たとえば、沖縄会館の「沖縄」がカタカナの「オキナワ」とされることにより「会館」が「カイカン」とずらされ、さらに「カイカン」が「カイガン」と変換され「沖縄海岸」になるなど、そのやりとりにおいて常に、音や文字のレベルでズレがおこっている。

その言葉にまた反射のおもむくまま……ああああああ、そうですね、ととりあえず答えた。無論何の事か判らない。何の約束か判らないという意味でさえない。どだい約束などしていいないのである。その上にいくら夢の中とはいえ、

私はマグロとの恋を引きずっている立場なのだ。

読者にとって当初から大きな謎となるのがマグロとの「恋」である。この物語や物語中の「夢」の特徴は何よりも時系列の「混乱」である。夢の出来事はかなり断片化<sup>(5)</sup> されていて、その時間的順番は多くの場合可変的である。

夢の中のマグロとの恋愛のせいで、私はどこにも、行きたくなくなっていたのだ。強いて行くのならマグロのいそうなところに行きたいとは思った。――ならば、葛西臨海水族園等に行けばよさそうなものだ。が、そこにいるのは現実のマグロであって私の考えている夢のマグロとは少し違う。

マグロは夢の中の存在なので、本来は移動して何処かに逢いにゆく存在ではない。だが一方で、現実のマグロは海の中の生物であるので、会いに行きたければ海に行くしかない。この夢の存在は、正確に言えば、マグロの様な存在でありマグロではない。そして、夢の電話の中で問題になっているのが、現実的に移動する先であるならば、それは夢の「マグロに近い、場所」すなわち現実の「海」になってしまう。

マグロへの「恋愛」は何かしらの強い「引力」として機能しており、それは時折きこえてくる「イラッシャイヨ」という幻聴（？）と重なってくる。「恋愛」という感覚そのものは、覚

醒していれば夢の中のことと相対化し得るが、そこから生じる抗いがたい力は否定し得ないものとして夢から現実へと跳躍し、具体的な移動の場所の決定に影響している。

……夢のマグロのいる夢の海は、恋に相応しい青さではなく、油の付いた灰色の金属のようにぼつと光り、細かい波だけが嬉しげにざわめいていた。そんな海が、枯れ草の生えた丘の向こうの、コンクリートで固めた狭い視界の中にほんの少し見えた。

夢の世界が無意識であるという解釈はあまりにもそのままであるが、実際マグロの持つ引力は、まるで「エス」であるかの様にただ海に誘う。また、その目的地が「海」であることも精神分析的な文脈が導入されれば、容易に「母体回帰」の物語になる。だが、問題はそれがどのような海であるかには別の要素が関わっていることだ。なぜ「コンクリート」や「油」に象徴される薄汚い海なのか。

私は少し困った。というのうちの猫は毎日マグロのキャットフードを食べるからだ。それ故に私はいつか彼の事を、マグロではなくて男の人魚かもしれないと思い始めた。というよりそんな考えの中に逃げた。或いはマグロの中から進化したものだ。するとそう思った時、心が通じた。マグロはこっちを見て頷いたのだ。それは恋人として

のマグロだったのだ。但し、恋といつても目と目を見交わす以外の事は起こりえないし、それが最高の到達点になる触ると爆発する恋愛用マグロ。そういう存在であつたらしい。そこから先の展開は一切なかつた。つまり、恋はただそこにあるだけの、恋だつたから。

夢の中ではなぜマグロなのかよりも、マグロであるが故に困つたことが問題となつてゐる。現実の生活において猫を飼つてゐる沢野には、マグロは猫のえさであるツナ缶と捉喻関係があり、逆に言えばそれが夢にマグロを産みだしてゐるとも言えるが、夢の当事者はマグロから連想される捕食関係に困り、別の意味づけをおこなおうとしてゐるのだ。

その連想を回避しようとした結果が、「恋人」すなわち「恋愛用マグロ」という別種の連想である。だが、このマグロとは「目と目を見交わす」ことが「到達点」であり「そこから先の展開」は「一切ない」ことが、「恋はただそこにあるだけの、恋だつたから」と凡庸とも見える文学的なレトリックで表象される時、我々はその直前の「爆発」という語を読み落としてしまふ。何故、このマグロに「爆発」という言葉が付されてゐるのだろうか。また、何故それは「恋」という力に覆ひ隠されてしまふのだろうか。

無論、判るはずはない。嘘に決つてゐる。聞いてもいない。でも口は自動的に嘘をつけるように、今は、心から離

してある。その方がまた、さもいろいろ考へてゐるかのやうに、ずっと賢そうに、喋れるのだ。(中略) 私の場合口と心が離れていさえずれば、相手の出方がどうでも少しも怖くはない。たとえどのようなタイプの「はい」が来たところで、論理整合性だけを気にしながら、何の意味もない言葉をペラペラ出す事も出来るのであるから。

「口と心が離れてい」とは、この不思議な電話における一貫した態度である。「心」がない会話とは、論理的あるいは比喩的な連想のみをよりどころにしてなされる会話である。ならば、この会話において「心」が介在すれば、一体どうなつてしまふのだろうか。

が、相手は論理が嫌いなタイプらしい。「あ、そんな事言つてゐる間に掛けてくださいよお。いきなり感情を、気分を絡めて来た。すると、ああなんというでもない肉声であるのに、なんという圧倒的な迫力であろう。感情の力。気分の強さ。このままでは説得されてしまふぞうだ。

フロイトの有名な指摘の様に、圧縮、隠喻、換喻など、夢の世界では「常識」や「感情」が介在しない言葉だけの連鎖が支配してゐる。<sup>(6)</sup>だが、この連鎖を支える論理も、現実の言語運用とは違つてゐるだけで、別種の論理である。それらにある

種の「意味」を与え再構築するのは、覚醒後の事後的な作用である。その意味で、物語の「夢」の中の「論理」に対峙するのは「感情の力」なのである。

以後の会話では、結局、「何処かに行く」ということは前提になってしまい、「何処に行くか」が焦点になる。だが、沢野の感情にあるのは「何処にも行きたくない」という想い、すなわち全ての行き先の「否認」あるいは、出かきたいという感情の存在自体の「否認」である。

一般的に「申し立てが事実でないと主張すること」とされる「否認」を、フロイトの精神分析は、「防衛本能」として捉え、また過去のトラウマが意識の俎上にのぼってくる過程に「抵抗」という現象を見出す<sup>(7)</sup>。

新井薬師前駅付近の自宅から出発するまでの電話は、沢野の「否認」の過程であると見做すことが出来るだろう。ただし、ここで急いで付け加えるべきなのが、それは「過程」であり「物語」ではないことだ。結果的にその「抵抗」は挫折に終わるし、その会話の文脈には通常考えられる何の論理的必然性もない。

## 2 「想起」「隠喩」「接続」あるいは「スリップ」する世界

電話の途中で「行き場所」の話題に唐突に加えられたのは、これが「仕事」の依頼であることと「写真」を撮らねばならないということだ。そして、事ある毎に「平成」という時代になったことを付け加える。もちろん、これらの事項の間には、

沢野が理解出来る様な何の論理的関連性もないが、電話による仕事の依頼という状況は、貧乏作家である沢野にとって、相手の出方に対してただ対応するという、受動的な位置を余儀なくさせる。

なが平成だ、随分言ってくれる、と思いつつもどうでもいいやという感じでつい聞き流してしまふ。だって嫌だったら断ってしまえばいいのである。どうせ何の覚えもない相手なのだから。でも、……それにしても結構当たっているね。変人で素人で文化から遠いのだ。ただ、そこで気付いた。——そうだ、カメラだって、文化なのだと。素人写真を撮るのにも最低限の常識と幸運がなくては行けないのだ。

ここで、政治、社会、文化とあらゆる面においての専門性を否定されたことを受けて、沢野はカメラの仕事の専門性を理由にその依頼を断ろうとしている。沢野にとって、これは「怒り」という感情の代替である「変なすね方」なのだと言う。理解しがたい相手の「論理」に感情で抗しているのである。そうした「抵抗」の中、「カメラ」という言葉が引き金になり、「カメラ」に関するある個人的な記憶が喚起<sup>スリップ</sup>されてゆく。それは、友人から借りたカメラでの撮影時の失敗の記憶である。

「私」が撮影の仕事をやがるのは、この記憶とともにカメラ自体を所有していないことにあるが、電話の相手は、カメラ

が安くなって来たことを根拠にその購入を促す。それを聞いて  
いる沢野は、電気製品についての個人的な記憶を想起する。

電気製品は何でも均一価格五万円になってしまったのか。  
だが、五万円というのは私の半年間の余裕と安心を左右す  
る金だ。ファクシミリは確かにそろそろ必要ではあるが、  
カメラなど一生に九回も使わないはずだ。そもそも何でも  
んなそんなに電気製品を軽く扱うのだ。

冷蔵庫やテレビ、洗濯機などの家電が「三種の神器」として  
憧れの商品であった時代から三〇年以上の時が経ち、大型家電  
販売店同士の安売り競争は加熱の一途をだとり、ほとんどの「電  
気製品」は、型落ちを気にしなければ安価に入手出来るようにな  
った。当初は、最新であることが性能の向上を意味したが、  
付与される性能は次第に実用性を失い、最低限の機能であるな  
らば、型落ちでも充分なものになった。

必要な機能が購入に繋がるのではなく、購入するために必要  
とは言えない機能が検討される。いわゆる、後記資本主義的な  
様相であるが、沢野は電気製品にそうした価値観を認めない。

だつてひょっこりひょうたん島の放映が始まった頃、あの  
頃親が買ったカラーテレビなどは、なにか一財産という感  
じだったのに、形見分けと言ったらカメラと背広だったし  
……でも、おや、でも一体私はどうしたんだ。気が付けば

昔の事ばかり思い出している。コレハアブナイ。ただ相手  
は気付いていない。そしてせかすばかり……。

「ひょっこりほうたん島」は昭和四一（一九六四）年四月六  
日よりおよそ五年間、NHKで放映された人形劇である。この  
時期は丁度「いざなぎ景気」を背景にした「新・三種の神器」  
（車、カラーテレビ、クーラー）が喧伝された。中でもカラー  
テレビは、同年の東京オリンピックを契機に最も早く普及した  
ものだ。

物語において沢野は現実のコノテーションをきっかけに記憶  
の世界に「タイムスリップ」してゆく。沢野の記憶は、個人的  
な記憶であるという意味で「小文字の歴史」であるが、ある意  
味典型的なそれでもある。逆に言えば、「小文字の歴史」であ  
りながら、そこには妙な世代的普遍性をもった記憶なのである。

——じゃ、とりあえず行きましようよ。ね、ともかく、  
変なところ。変なところ。

——ああはいはいはい、だったらものすごく変という  
たとえばですねえ。

絶え間なく続く外出の誘いに対して、次に沢野が提案したの  
は選挙の取材である。だが、それは、自分の部屋の窓から見え  
た偶然の景色からの連想に過ぎない。基本、引きこもりの様に  
暮らす「私」にとって、「窓」から見える景色だけが「世界」



であった。会話では「選挙」の話をしつつ、頭の中では、集合住宅の三階にある「窓」から見えた「景色」からの連想が広がっている。

外に出るのが嫌な時は、そこから全世界を眺めているつもりになれば良かったのだ。——などと言うと、それでも外国は見えんでしょう、と温厚な人が、手慣れた態度で、こちらが反論するためのきつかけを作ってくれるなどという事が起こりそうな状況だが、でも外国に近い眺めならあった。

窓の中の「世界」という比喻が「世界」の人々というイメージへと繋がる。

例えば不況以来姿の減ったと言われる外国人は、夜になると必ずこの窓の下をひっきりなしに通る。ペルーにパングラデシユ、そしてホンコン、歌にある万国の労働者というフレーズを思い浮かべるしかない。

「万国の労働者」という「歌」とは、大場勇の「メーデー歌」(一九二二年)であるが、この景色は遠い過去のものではなく、「二年ほど」前である。むろん、それすら二〇一八年の現在から見れば、外国人労働者の増加という歴史的現実が語られているわけだが、それは語りの現在(初出時とすれば一九九四年六

月)から見ても、語りの現在まで続いているという意味で、「タイムスリップ」としての情景ではない。だが、この情景もまた過去の時制に接続してゆくのだ。

ああ、いつか確か彼らは口々に窓の下で、ジンバブエのチヨコレートを、バレンタインデーに売り出すとか言っていたのだろうか、いや、ケニアのだっただろうか。違う。ケニアの方は確か、チヨコではなく、そう、ケニアのアリという人が浦和の病院から、私の家の向かいの病院の清掃をしている友達を訪ねて来て、…(以下省略)

この連想から生じた「チヨコレート」は、この後別の連想に繋がってゆくのだが、この時点ではカカオ豆の産地からきた連想でしかない。一方で、こうした国々への連想の発端が「選挙」であることに思い至り、会話の位相に戻ってくる。

### 3 「海」という目的地 あるいは 二つの無意識

まあいいや、まあまあ、今は選挙、選挙。でも相手はそれがまた気に入らなくて。

——うーん、選挙、だってしかし選挙よりも、やはり今是不況ですからねえ、……不況で昭和というコノテーションですよ、ですからほら私共にはね、海芝浦というね、駅があるんですよ。それで、あなたそこに行きませんか。

この言説は、その重要度に反して非常に難解である。「選挙」という具体的提案が「不況」であるという現状認識に接続することはともかく、ここで突如出てくる「昭和」が「不況」の「コノテーション」であるというのは理解に苦しむ。繰り返された「もう平成」という言葉から、「平成不況」だと考えれば、そこから最も近い「昭和」はバブル期に相当する。もし、「メーデー歌」などから昭和初年代の不況を想定したとすれば何とか意味は通じるが、だとすれば、後に高度経済成長のイメージに接続してゆく展開とは一致しない。

——え、何ですって。

どうもまたしても急に、変な事を言われたような。

——だから、海芝浦うみしばうらっ、ですよ。

すでに、あつという間にテーマが違っている。時代も平成から昭和に戻っているのだから……でも、なんだって、駅だって、うみ、それにしても聞きにくい駅名である。

結果としては電話の主題が「昭和」へと移行<sup>オフト</sup>している。この流れから先の発話を考えれば、「不況」と呼ばれる「今」が「平成」であることは確かで、注目すべきは「……不況で昭和というコノテーションですよ」の冒頭にある「……」と「で」の解釈にあるのだろう。「平成」が「不況」のコノテーションであり、「不況で昭和」というイメージが呼び込んだものが結果的に「海芝浦」であるのだとすれば、「海芝浦」という連想<sup>スリッ</sup>は「不

況」かつ「昭和」という「コノテーション」によって喚起<sup>オブリ</sup>されたイメージであつたと理解できるはずだ。

——ええと、えき、なんですね、それでうみ、なんですって、……海品川、馬白裏、なみ、しまうら、ちよつと、待って、下さい。

一見、駅名を固有名詞として理解出来ないだけの様に見えるが、事後的な位置にいる語り手は「不機嫌もコミ」で意図的に面に駅名をずらしている（スリップしている）のだと振り返っている。

——だから、うーみーしーばーうらっ。

——ええと、きーみしーまならっ、君島奈良、ですか、山の中なのねえ。不機嫌が加速して言葉はまたずれた。奈良の近くに君島というところがあるに違いないと私はすぐさま連想した。私は伊勢出身なのだが、伊勢松阪、伊勢川崎、などと伊勢市の外に地名の複合したところがあるらしいからだ。それでは奈良出身の君島の人が奈良を偲<sup>おも</sup>い、そのような地名を付けたのであろうかと連想は走る。でも相手は「誠実」だ。

正確な地名を避けるように言葉をずらして「抵抗」「否認」し続ける。「抵抗」自体が目的であれば、ずらし続けるしかない。

こうした「抵抗」を差異の戯れと捉えるのなら、同じ言葉を使いながら、あくまでも同じ目的地に誘い続ける電話の相手の態度は「誠実」である。

やっと、言葉を、普通に受け取れる瞬間が来る。

——判った。それは、海で芝で浦だ。

——あたり前じゃないの。聞いた事あるでしょう。

——いいえ、ただの一度も。

そこで初めてその駅の名前を知った事になる。海で芝で浦、うでみでしでばでうでらで、ある。昔ぶとらとちとなでブラチナというのがあったがそれよりも変だ。

結果的に失敗するものの、「ブラチナ」を「ぶ」「ら」「ち」「な」という音素に還元した上で理解可能なものとしようとすると態度は、「海芝浦」を「海」「芝」「浦」と分解し、「芝」を「島」「浦」と「島」を「浦島」、芝を一枚の布の様に再構築し、それが現実を隠す舞台装置であるかの様な妄想に繋がっている。

全ての芝が一本の糸のように繋がっていて、どんどんその手元に手繰り寄せられてしまう。芝と一緒に海も縫い目を引っ張られた布のようにめくれ上がる。(中略)そのウラシマが消えると、その下にあらためて、漸くようや、浦、と呼ぶに相応しい現実感のある海が現れたのだった。

ふと当初の目的であった「海」に接続してしまった。相手の言葉に抗して、ずらし続けようとした結果、自らたどり着いてしまった「海」には、もはや抗い難い誘惑を感じてしまう。

——……イラッシャイヨ……。

とふいに聞こえたのは、電話が混線したのか、それは、あまりにも懐かしい声であった。同時に今まで一度も聞いた事ない声であった。夢のマグロが、私を呼んでいた。初めて、マグロが声を出した。しかも……来いと言っている。海芝浦へ。だが正直なところ、イラッシャイヨという言葉が、海芝浦にという意味なのかどうかは判らないのだった。そこで私はあわててマグロに向かって語りかけた。

——今なんて言ったの。どこへ行けばいいの。あなたはどこにいるの。

この混線した声がマグロである確証はないのだが、沢野はマグロであると確信して語りかけている。むしろ、この確信は、電話の主そのものがマグロである可能性を感じさせもするが、マグロの声は「海」への外出を「恋」という欲望で導き、一方で、電話の声は現実の「海」芝浦という目的地に言語の隠喩的な機能で導こうとする。その意味で、電話での会話は、欲望に形を与える「超自我」としての役割が与えられているとみるこ

——いえっだからブレードランナーと言っても決してレプリカントとかの話ではなくてね、つまりね、そこは高度経済成長の名残の路線なんです。

「ブレードランナー」で混乱を極めた「私」の想像力は「高度経済成長」という言葉を付されさらに混乱する。「私」はバブルの恩恵も受けておらず、円高差益と消費税、さらにバブル後の不況くらいしか、経済の動きに対する実感が無い。「マグロ」の幻影は遠のき、代わりに「マクロ」経済の歴史に翻弄され続けた一〇年を「小文字」の歴史として振り返る。

不況の後の「海芝浦」の景色とは、京浜コンビナート地帯のことである。特に重工業は、高度経済成長期の象徴であったが、石油ショック以後、経済の中心は、二次加工業あるいはサービス業に移行してゆき、バブル期に至っても大きな回復をなしえなかった。「ブレードランナー」で描かれる近未来の世界は、二〇一九年を舞台にしたものだが、それが公開された一九八二年の日本は、まだ公害の記憶、爪痕が生々しい時期であった。一九六八年に公害対策基本法が制定されたことが逆説的に象徴しているように、一九七〇年代は、各地で光化学スモッグが発生し、公害にまつわる訴訟が後を絶たなかった時期である。「ブレードランナー」の描く大気汚染が進んだ重々しい近未来都市は、強いリアリティを感じさせたのである。

「海芝浦」を「高度経済成長の遺跡」と見て「ブレードランナー」を重ねる電話の説明は、その意味で写実的（リアル）ですらあったのだ。

だが、その写実性（リアリティ）や歴史性が「私」に伝わるはずもなく、誘惑とともに「反発」の気持ちも生じ、会話は無駄に引き延ばされてゆく。

——ふーん、ふーん、ふーん、そうだったの、それでブレードランナー、でもね、私は海は見たいですけど、それでも駅の片側が海というのがちょっと怖いんですね。なんだか体が半分だけ海に吸収されるようで、そんなところでバランスを取って立っていられるのでしょうかね。

だが、この「反発」は「感覚」に基づいているため、容易に相手に伝わってしまう。結果、「海芝浦」の話は、急遽「花屋敷」に変更されてしまう。この会話において表層的な言葉の連鎖は、何故か「マグロ」という深層の欲望にたどり着くが、「感覚」や「感情」といった判断が介入すると途端に異なる方向へ話が移ってしまう。

両者の会話は再び「写真」から始まる表層の連鎖に戻る。

これでもう相手への会話の通じ方が、まったく判らなくなってしまった。結果、頭の中に残った単語は、写真、だけになってしまっていた。私は仕方なくそれについて喋ってみた。通じない分を、フレンドリーにして。

近所のスーパーにおける海外の商品の「写真」の話題は「ハ

ワイ」に写り、「ハワイ」は海外「旅行」へ、海外「旅行」は「イラン」、「イラン」でのホテル滞在から「政治性」の有無の問題につながり「もつと楽で楽しくてなんか食べて帰れるところ」を希望する。そこで、電話の相手から映画館で「ジュラシックパーク」を観ることが提案されるが、それに「本物の恐竜なら見たい」と応答してしまう。こうした、相手に合わせながら、会話中の一部の言葉のイメージのみで連鎖してゆくことを沢野は「迎合」と呼ぶ。「仕事の依頼」が象徴する夢の世界で、沢野は「迎合」から逃げられないのである。

——ああ……そう、本物ね、本物といえね、本物の恐竜もいいですけども……そうだ本物の海も見たいでしょう。恐竜はつくりものでも、海は、本物です。

結局、恐竜、はエサだったのだ。偽物はいや、と私に言わせるための。

——……イラッシャイヨ……。

結局、「海」に戻ってくるのだった。さらに、そこにマグロの声。ここで「私」の行く先は決まった。これは、一見、電話相手の誘導に逆らえなかったとも読める。だが、電話相手は、あくまでも表層的な言語連鎖の会話の相手である。それは、何処までも終わりのない連鎖である。そこに、一定の「収束」(解決)を与えたのは、他でもない「マグロ」の声である。

自分では形だけ迎合しながら、電話の相手を無視している積もりだった。が、気が付くと結局海芝浦に行く事だけが残ってしまった。いや、そういう読み自体が実は私のひとり芝居かもしれない。だって、なんだか知らないけれど「呼ばれている」だなんて。頭を抱えていると、三分後にまた電話が掛かって来た。すぐに掛け直した電話でも相手は三秒、黙るやつであった。話題は当然また別方向にずれてしまっていた。

電話自体が夢であり、その会話もまた夢の中の「ひとり芝居」であるとしても、「マグロ」の声と「電話」の声は、違う位相にある。「呼ばれている」のは「マグロ」にであって、「電話」の声にはない。電話の声は、「当然」のこととして「また別の方向へずれ」てゆく。

#### 4 ハワイとオキナワと目玉 あるいは 錯綜する時間

——ええとね、……ハワイはともかく、沖縄会館行きませんか。

既に自己放棄してしまった私は従順に喋った。

——え、沖縄の海岸に行けるんですか。でも今だと暑いから、

相手もさも従順そうに受け答えた。

「海芝浦」という目的が決まった途端に、もう一つ別の経由地が与えられる。これは、先の「ハワイ」という連想からの「沖縄」への誘いである。南国つながりで両者が結ばれていることは容易に想像出来るが、実際に提案された場所は沖縄「会館」であり、沢野は、それを勝手に「海岸」にずらしてしまう。

——だから、沖縄会館ですよ。気温は同じなんです。大丈夫ですよ。それで鶴見つて駅を知ってますよね。

——知りません。まったく。ぜんぜん知らないっつ。いくら否定を重ねても、従順さは、変わらない……。

——あのね、それは目的地の途中にありますから、そこで、ああしてこうして、それから中野ブロードウェイの地下なんかだと、マグロの目玉が一個から売っていますから、一番近未来っぽい駅で降りるんです。そのイリフネ公園を横切つてね、高架下をくぐると沖縄会館がある。従順でいたところで、話は通じない。

「話」を「通じな」くさせている最たる原因は、「海岸」というズレを除けば、「それから中野ブロードウェイの地下なんかだと、マグロの目玉が一個から売っていますから」という挿入句だろう。ここがなければ、沖縄会館までの行き方を説明しているに過ぎない。「私」の最寄り駅は西武新宿線の都立家政なので、中野区ではある。だが、中野ブロードウェイは、「私」の移動経路の中にはない。

この「マグロの目玉」の模型に相当する商品は不明である。だが、サブカルの聖地の一つとされる中野ブロードウェイにマグロの目玉の模型が売っているというのは、納得がいく。中野ブロードウェイは、昭和四一（一九六六）年に、中野駅北口開発の一環として中野サンモール商店街との複合施設として開業されたが、その土地買収過程等に様々な困難があり、また予算削減のための大幅な設計変更もあつて、入り組んだ通路など利便性を犠牲にした現在の形になった<sup>(8)</sup>。

だが、一九八〇年代後半のバブル期には、新宿、池袋、吉祥寺等の近隣商圏の著しい発達の影響等もあり、集客力を失い一時はシャッター商店街の様な様相を呈していた。一口にバブル期と言っても、地域によつてその盛衰は様々だったのである。この衰退期に同地で勢力を拡大していたのが、一九八〇年に開業した漫画古書店専門店である「まんだらけ」である。同地における「まんだらけ」の店舗拡大によつて、その客をねらつた多くのマニア向けの専門店が、さきの空き店舗に集まるようになり、結果現在のサブカルの聖地の様なイメージを形成するに到つたのである。その意味で物語の語りの現在あるいは実際の移動の時期は、まさにそのイメージが定着しつつあるところであつた。

——それ、沖縄の海岸つて空港の近くなんですか。

——え、だから成田じゃないって、港の側だってば。

判らん、でも電車に乗つて、沖縄に行け、と命ぜられた

らしい。プラットホームの側から海底電車でも出ているのか、虚しい、けど一応。わーい沖縄だい。という……喜びの演技をしようとしているうち、急に、沖縄がオキナワに変換されていた。知らないところで、私の意識がコントロール出来ぬ底の方で。

「会館」が「海岸」と変換されていることに気がつかないように「沖縄」が「オキナワ」と変換されている。周知の様に「沖縄」という名称は、一八七九年の琉球処分によって与えられた名称であるが、敗戦後の一九四六年にGHQ覚え書きによりアメリカ軍政に移管。以後、サンフランシスコ条約以後もその返還は実現せず、一九七二年まで本土復帰は実現しなかった。その意味で、「沖縄」に「オキナワ」という表記が付されるのも、また他者から与えられた名称であったと言える。「意識がコントロール出来ぬ底の方」で「沖縄」の時間は逆流し「オキナワ」に戻されたのである。

オキナワヘンカン。頭に浮かぶのは教科書の写真、アンダーラインだらけの日本史の文章がぞろぞろ出てくる。そこでまた沖縄変換はオキナワ返還に変わっており、するとハワイと沖縄を並べた共通項まで、観光から戦争に変わっていた。

「オキナワ」が変換されて「沖縄」に戻ったとは、その呼称

を使う主体の変化に過ぎない。しかし、その変化こそ、政治上の出来事であり、歴史上の事件となる。さらに、教科書に記載される歴史上の「オキナワ」という片仮名表記はさきの「戦争」の記憶とともに、「ハワイ」という呼称の記憶を呼び込む。

どこにも行きたくないのは確かである。が、マグロの目玉というフリーズとあの、イラッシャイヨ、が大変気になる。その上に本物の海は嫌だが夢の海なら見たい。あのマグロにもう一度ちゃんと会って、一体自分の心に何が起こったのかを確かめてみたい。だがそうしようとすると、恐ろしい事に外出をしなくてはならないのだった。

マグロのイメージは、なぜ「目玉」に結びついていたのか。「マグロ」の語源には諸説あるが、その一つに特徴的である大きな目があると言われている。大きな黒い目が、目黒となってマグロとなったものである。その意味においても、マグロの目の模型が存在することは想像に難くない。

さらに、平成に入ってDHA（ドコサヘキサエン酸）のブームがあったことも無関係ではないだろう。必須アミノ酸のひとつで、魚類に多く含まれることから、日本人の摂取量は以前は多かったのだが、魚食の減少でその不足が問題となった。一九八〇年代以降に研究が本格化したこのアミノ酸は、一九八九年のイギリスの学者の報告により特に学習機能向上作用が指摘されたことで、日本でも、いわゆる「頭をよくする物質」として

ブームが起きる。そして、その含有量が一番多いのが魚の目であると考えたのである。

こうした歴史的、同時代的な象徴を帯びたマグロの目は、目的地に近づくにつれて、全く異なる様相を示してくる。

一旦は疲れて公園に入ろうとした。その時に空を見上げたのだ。すると直径何メートルもあるマグロの目玉が空に浮かんでいた。かつて夢の中で見たマグロの目は、瞳孔が開いてはいたものの厚みのある、近眼に見える、丸いおとりした二重瞼の目だ。ところが空に浮かんでいるそれは既に、私の恋人のものではない。目を開いたまま、百億年のコールドスリープに入ってしまったような、厳しい目だ。

テキスト終盤において、恋のきっかけであり、移動の目的の象徴的部位であったマグロの「目玉」は、沢野を空から監視する何物かになってしまっている。「エス」の様に導いているはずの「マグロ」は突如反転し、「超自我」の様に沢野を監視し続けていたのだ。

「触ると爆発」という表象。ある意味、ここで沢野は、マグロに触ってしまったとも読める。だが、一方で「爆発」という表象を「マグロ」ととに普遍化すれば、全く違う文脈が召還される。

これはマグロに限ったことではないが魚の形を一般的に紡錘形と呼び、この形状は爆弾の形にも使用されるので、両者はし

ばしば隠喩的な関係性をおびる。

一九五四（昭和二九）年三月に第五福竜丸がアメリカのビキニ環礁の水爆実験に巻き込まれた事件はあまりに有名だが、この漁船はマグロ漁船だった。実際その時水揚げされたマグロは「被爆マグロ」と呼ばれ、築地にある種の風評被害をおこしてもいる。また、マグロの様な回遊魚は放射性ヨウ素を体内に蓄積しやすく、食物連鎖による被害をまねきやすいことは古くから指摘されている。

つまり、「マグロ」は未来からの呼びかけに見えながらも、現実としては過去の記憶を召還する可能性があるということだ。このことは、「スーパージェッター」が未来を象徴していることを考えても納得がいく。

沢野の「対象a」（J・ラカン）としての「マグロ」は、未来／過去が容易に反転するような何かなのであり、そこから構築される断片的世界も、あらゆる時制が錯綜する場なのである。

## 5 東芝とチョコレート あるいは 溶け合う表象

電話の最中での感情的な反論の最中、「チョコレート」の話題に移行した時があった。

ついに涙が出てきた。何事かと思った。が、同時に、そうだチョコレートだった、と頭がいきなりはつきりし始めていた。ただ、なんでチョコレートが出て来てそれで頭が



はつきりするのかは判らないのだった。海芝浦とマグロ、そしてチョコレートとの間に、夢が無意識か妄想か知らぬがともかくそのあたりのレベルでの神経系の絡み合ったような体温のある繋がりが生じていた。それが、私を泣かせたり笑わせたりにしているのだ。相手には無論まったく判らなかつたのだろう。伝わった単語はなにしろ、最初の一語だけだ。

この直感的な疑念は、実際の「移動」の際に明らかになる。このテクストに「物語」らしきものを読み取るとすれば、夢の世界の移動で生じた疑問が、現実の空間移動に引き起こされた時間移動を通じて明らかになる物語となるが、それは従来の因果論的な物語の形式を破壊しながら立ち現れて来る。

出発時の描写から沢野が「チョコレート」好きで日常からよく食していることが分かる。最近では「ハーシー」のエクストラ・クリーミー・アーモンド」に凝っているという。むしろ、この好みは、マグロのもとへの「移動」と関係しているのだが、それは「マグロとの恋愛」に凝っているという言葉と呼応している。また、鉄道の中でしばしば眠りにおちるところも、現実と夢が溶け合つた関係であるこの移動の特徴をよく示している。

伊勢から上京した沢野にとって東京駅は全ての起点である。新井薬師前駅から新宿を経由して中央線で東京駅へ出る。そこから先、すなわち東京から新横浜の間にある地域は、沢野にとっては東京ではなく、「東京の向こう」である。京浜工業地帯に

向かう川崎、鶴見は、工業地帯で働く人々にとっては「ベットタウン」であつても、西から東京に上京して来た人々には通過地点でしかないという感覚。だが、これとても、同じような境遇と世代の人々にとっては共通感覚であつたのかもしれない。

そうだ降りなくては。寝惚けていて、しかも駅名を忘れたままそこが海芝浦だと思ひ込んでいる。横浜銀行の向こうが海なのだろうか。が、どうもおかしい。駅の構内に出ると、ガラス越しに見えるのは妙に懐かしい町だ。ごちゃごちゃしたビルの高さ。賑やかそうなのに、光が薄いような煙った空気も……、海に面したブラットホームのはずがなんでこんなに広い明るい、何本も線路の通つている駅にいるんだろう。見覚えがあつた。無論、錯覚の。でも思ひ込んだ。ここは、四日市じゃないか。私の生まれた町。

「鶴見」で見た風景が己の故郷である「四日市」と重なる。両者は、東京、名古屋という大都市圏をそれぞれ支えたコンビナート地帯へ続く風景なのである。

大体五百人のおやじはどこに消えた。窓口から洪水のように出て行つたというのか。いつそホラーコミックに投稿してやろうか。だって「本当の怪現象だ」、ついでに言いたくなるから。そうしたら怒つた大槻教授が、「こんなの怪奇現象じゃありませんよ。プラズマ現象のせいですわね」と、

原因を解明してくれるかもしれないから。

鶴見駅は、京浜工業地帯へ繋がる重要な駅の一つである。そこに、はるか昔の景気がよかった時代のサラリーマンの大量の幻影を見る。一方でこれを「ホラー」として当時科学的見地から超常現象を否定することでも有名であった大槻教授<sup>(9)</sup>のイメージを援用して相対化しようとする。

社会の教科書の中のコンビナートの写真が、記憶に紛れ込んで幼時の過去と一体化しているのだった。海芝浦という駅の名を知らなくとも、またいくら私が世間から隔絶した人間であつても、高度成長期の鶴見と川崎の意義を知らなくとも、そこからコンビナートへの既視感を持つ事は不可能ではない。小学校の教科書も蘇るものなのだ。鉄道唱歌とか教育勅語も、きつとこんな感じで出てくるのだろう。日本の産業、コンビナートの写真……四日市の祖母の家の、そこから先はコンビナートに向かうという運河に掛かった橋、その橋のたもとに一軒の雑貨屋があつた。三、四歳の私はその国産チョコレートが好きだったらしい。店の前にはエスキモーかどこかのなのだと思うが、看板代わりに、木で作った厚みのある白熊の人形が置かれていた。それは大人の背丈よりずっと高かったように記憶している。

現前する風景から、その当時の流行のイメージを喚起させて

いるだけではない。四日市という遙か離れた土地、己の幼少期という遙か離れた過去、「ブレードランナー」という存在しない架空の風景、教科書で学んだ様々な写真、知識……。これらが幾重にも重なりながら移動してゆく。こうした時代性を帯びた風景は、沢野の個人的なそれでありながら、それだけとは言えないものだ。

四日市のコンビナートの風景は、沢野の個人的なものであつたとしても、当時の日本には沢山のコンビナートの風景があり、それらは全体としては相似形であつたに違いない。「富士」「日本」など車窓から見える多くの企業名も同様に、隠喩的關係で日本の企業という普遍的なイメージに回収されてゆく。それが、社会化、歴史化されれば、なおのこと高度経済成長期の一風景となる。

一方で、チョコレートは、沢野の幼少期の記憶と繋がりがつつ、今も沢野の趣向を形作っている。

昭和三十年代、という事は私は子供だった。父はまだ会社を始めていなくて、身内のところで雇われ社長をしていたのだ。それでもあの頃はもう毎日東京から日帰りしたりしていた。何日か留守にして、アメリカの土産物をどっさり持って帰って来た事があつた……。記憶の中の父が喋っている。

父親が当時の「オキナワ」（沢野はアメリカだと思っていた）

から持つて帰る土産がアメリカ産のチョコレートだったのである。アメリカで最初に大量生産を可能にしたハーシー製のチョコは、アメリカのチョコを代表する味でもあった。しかし、日本では戦後、国産のチョコレート会社が台頭し、その味も日本人好みに改良されたものが一般化した。ハーシー・ジャパンが設立したのは一九八九（昭和六四）年七月なので、沢野はその後国内に流通した「エクストラ・クリーミー・アーモンド」に「凝った」ことになる。四日市は出生の地であり祖母の記憶、チョコレートは父の記憶となると、残りの類推は容易い。

実は四十年前も前、東芝の技師だった母は半年間だけこの海芝浦の工場に向向していた。鶴見から帰った日、電話でそれを知った。母は東京近くの東芝の重役の家に泊めて貰い、焼け跡を歩いて、この電車に乗って通勤した。あのホームを見るとね、海に落ちそうな気がして、と母も言った。

最終目的地である「海芝浦」「東芝」とは、母の記憶であったのだ。「海に落ちそう」な感覚とは、母娘に受け継がれた無意識の感覚である。もちろん、精神分析的文脈では、「海」への母体回帰という凡庸な話でもある。だが、言うまでも無く精神分析の理論は、世代の記憶を伝承したり未来の予知をしたりすることを「説明」するオカルトではない。

それから半年以上経って、私は初めて行った中野ブロード

ウェイの地下で、マグロの目玉を一对六百円で売っているのを見た。絶対に予知夢ではないと思った。ただいつものまにか、マグロの目玉がブームになっていたのだった。それが電話にどうして紛れ込んだのかは、未だに判らないままだ。その二日後、ふいに思い出して若い男の子に、二十一世紀とジェッターの話をした。すると男の子はひどく蔑んだように、ジェッターは三十世紀です、と冷たい声で訂正したのだった。

スーパージェッターは、タイムスリップする二つのタイムマシンの衝突により始まる話である。遙か年下の子供に、遙か昔のアニメの詳細を訂正されるという経験。この誤った記憶と正しい記録の邂逅という、タイムスリップを可能にしているのは、オタク的な知識の追究であり、そういう人間が集う中野ブロードウェイという場である。

無意識が意識と異なるのは、それがクロニクルな時間や、因果論的な論理、物理的な時空を超えて言語が結びつく場であるからだが、それを可能にさせているのは、見て来た様に、言語のもつ基本的な機能、すなわち換喩的、提喩的、隠喩的な機能に他ならない。それが、言語の移動を、時間や観念の移動を可能にしているのである。

つまり、これらが制限された世界の方が、我々の意識世界なのだ。だからこそ、大文字／小文字の歴史、夢／現実は容易に反転し、我々の世界も、そして物語も常に變動し続けてゆく。

【註】

- (1) 山崎眞妃子「笙野頼子 研究動向」『昭和女子大学』二〇〇五年三月。他の先行論文に、このテキストに「首都探検モチーフ」をみる清水良典『笙野頼子 虚空の戦士』（二〇〇二年四月、河出書房新社）や、テキスト内部の都市表象を調査した、宇野憲治「笙野頼子『タイムスリップ・コンピナート』論——昭和という時代は——」（『比治山大学現代文化学部紀要』11号、二〇〇五年三月）があるが、本論とは別のモチーフによるため、本論では取り扱っていない。
- (2) 高井有一、井口時男、中沢けい「創作合評 第二二三」『群像』49巻7号 一九九四年七月
- (3) 勝原晴希「時は滑り海の記憶が甦る——タイムスリップ・コンピナート——」『現代女性読本④ 笙野頼子』二〇〇六年二月
- (4) 竹内佳代「『タイムスリップ・コンピナート』＋読者」（想像＋連想）×戯れ」『現代女性作家読本④ 笙野頼子』二〇〇六年二月
- (5) 中川成美「SF的想像力と文学——笙野頼子の冒険——」『論究日本文学』一九九九年三月
- (6) ジークムント・フロイト著、新宮一成訳「夢解釈」『フロイト全集』四巻、五巻、岩波書店、二〇〇七年五月
- (7) アンナ・フロイト著、外林大作訳「自己と防衛」一九三六年二月、誠心書房
- (8) 平松剛「サブカルの魔窟 中野プロードウェイ」『毎日新聞』（夕刊）二〇一二年二月二日
- (9) 物理学者・大槻義彦は、早稲田大学名誉教授。一九九〇年に電磁波で火の玉を作り出すことに成功し、鬼火、狐火などと呼ばれていた心霊現象を科学的現象として証明。以後、テレビ番組などで、霊的現象を化学の立場から批判する論客として活躍した。